



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.38 (2010.8.10)



市大初！留学支援専門員による留学支援

「語学センターとも連携、留学サポートの充実化」

今年度より、新たに本部棟1階の学生グループに留学支援専門員のデスクが設置されました。留学支援スタッフとして加わったのは、小柳昌生さん。留学に行きたい学生への情報提供、外国からの留学生のサポート等、これから幅広く留学に関するサポートが充実していきます。

小柳さんに、アドバイザー制度(仮)などの新たな構想や、学生への熱いメッセージなどをレポートしていただきました。

目次：

「市大初！留学支援専門員による留学支援」	
留学支援専門員 小柳昌生さん	1
ミニコラム：情報科学部 高濱徹行先生	2
CALL機能紹介②	2
夏の信濃追分高原；過ぎ去らぬ者	3
新センター長のメッセージ	
国際学部 横山知幸先生	4

●留学支援専門員のご紹介



小柳さん
本部棟1階学生グループ

はじめまして、留学生支援専門員の小柳昌生と申します。留学生支援専門員は、今年の4月より広島市立大学で始まった、外国人・日本人留学生の留学に係る相談・支援を目的とした専門スタッフです。私自身も海外で勉強や仕事をしていた事があり、留学生視点で留学生のためのアドバイス等をしていきます。留学生支援と言っても、支援対象により大きく2つに分かれます。1つは、外国人留学生支援で、もう1つは日本人留学生支援です。

●語学センターと連携、留学アンケート

日本人留学生支援においては、今年度より語学センターと私、留学生支援専門員でいくつかの連携を考えています。例えば、今進行中の1つには、過去の留学経験者にアンケートを取り、データベース化し、今後の留学支援の充実を目的として、語学センターの方で常時閲覧できるようにしていきたいと考えています。あわせて年2回予定している海外学術交流協定校の留学説明会にも、留学データベースを活用していきたいと思います。個人留学、交換留学に関係なく、留学に関する資料があり語学の勉強もできる語学センターをもっと活用してほしいと思います。

●留学生サポート、新たな構想

まだ全然形にはなっていませんが、1つ目はアドバイザー制度(仮)といい、学内で日本人学生と外国人学生の接点をもっと作り、かつ、新入学留学生を多角的にサポートしていくという制度です。

本大学に来る留学生のサポートを通して、日本で外国語を使い、外国人と友達になりたいと思っている学生にとってはとてもいい機会です。駅前留学ならぬ、学内留学と言っても過言ではありません。2つ目は、将来、留学生を

中心とした会を発足できないものかと考えています。例えば、学園祭で留学生会として参加、交流会を企画し、主に学内での様々な交流を考えています。また何か良いアイデアがありましたら、どんどん小柳まで教えてください。

●学生へのメッセージ

1つだけ知っておいてほしい言葉があります。それは「ピッペンクルー」というタイ語です。日本語にも英語にも似た様な言い方はあります。「失敗は先生だ」という意味です。私が大学を卒業した頃は、自己紹介をするのにも一苦労でした。しかし、たくさん間違いや恥ずかしい思いをしてやっと形になりました。日本人はHow are you?と聞かれると、多くの人はI'm fine, thank you. And you?という中学校の初めに習った答えを使う事と思います。しかし、状況によっては、例えば、Fine. Good. Cool. Not well. という多様な状態表現にI'mを加えたりして無限の形があるのですが、気分が悪くともI'm fine, thank you. And you?を使っているような気さえします。日本の中学校・高校で英語(言語)を絶えず形を変えている文化の1つとしてではなく、テストにおける問題の唯一無二の絶対の答えとして勉強している事の弊害だと思われます。

でも、今少し考えてみてください。私たちは、例えば20数年日本語で生きてきたのに、知らない漢字はたくさんあるし、わからない言葉もあるし、言い間違える事も多々あります。そうであれば、英語は間違えて当然です。どんどん恥ずかしい思いをして間違えてください。とにかく、伝えようという心をもって話をしてみてください。最初は当たり前に通じなくても、通じたときの喜びや感動は、何ともいえません。事実、怠け者の私がそうでしたから皆さんも同じようにできると 생각합니다。

何か相談等あれば、語学センターか事務局1階に小柳を訪ねてきてください。今後アンケート依頼をはじめ何かを依頼する事があるかもしれませんが、その際はよろしくお願ひいたします。



国際会議 C E C 2010
における発表風景

日本には「読み書き算盤」という言葉があり、古くから国語や算数の教育が行われてきた。国語では「話す聞く」も重要であるが、会話は自然に身に付くものという感覚があるためか、自分の意見を話したり、他の人の考えを聞いたりのための授業を受けた覚えはあまりない。英語についても、英会話の授業を受けたが、「読み書き」重視で「話す聞く」は例文を聞いて発音することが多く、自分の考えを「話す」という機会はほとんど無かった。しかし、最近英語を「話す」ことについて少し変化があるように思う。

10数年前から時々国際会議に出かけ、英語による研究発表を聞くようになった。日本人の学生発表では、準備しておいた内容を読むか、暗記しておいた内容を発声するという学生が多数を占めていた。ところが、最近は自分の研究内容を「話す」学生が増えてきたという印象がある。もちろん事前準備を十分にしていることが大きな原因であると考えられるが、これが「話す」教育のおかげならば大歓迎である。

外国語を学ぶ皆さんも「読む」だけではなく、間違えることを恐れずに自分の考えを「話す」ことに挑戦してみてください。



語学センター教室の機能紹介②

基本の「き」：リスニング練習、ペア練習

語学センターには1994年の大学開学当初から、現在と同様、CALL (Computer Assisted Language learning) 教室があり、全国でも有数の先進的なセンターとしてのスタートを切りましたが、当時はまだ学生ブースにパソコンがない旧来型のLL教室もありました。このLL教室では、音声を学生のカセットテープに配信・録音して繰り返し聞かせたり、学生をペアにしてマイク付きヘッドホンで会話練習させたりができました。

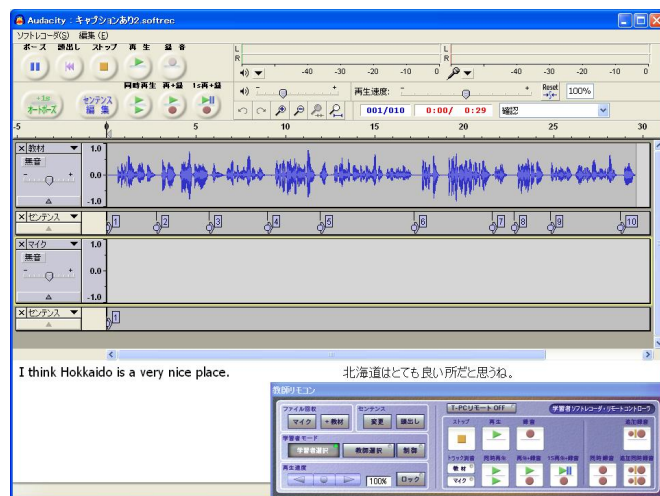
今は一見、パソコン教室のような語学センター教室ですが、元はこのように外国語学習のための音声利用や会話練習ができる教室から始まり、外国語担当の先生方の教室でのニーズや授業アイデアを反映させながら徐々に改良され、進化してきています。現在の教室の音声リスニングとペアに関する主な機能は以下のとおりです。

<ペア・グループワーク機能>

- ・ペア / グループ会話練習・画面共有 (2～5名まで)
- ・ペア / グループモデル提示 (教員参加可)

<音声利用機能> *専用ソフトウェアで扱います

- ・教師側からの学習者一斉コントロール (例：教材音声や学習者音声の一斉録音) と各学生によるコントロール (例：各自で音声録音)
- ・教材ソース：CDやBlu-rayなど教卓で扱えるもの
- ・再生スピード変更 (例：スピードを遅くして聴く)
- ・学生から教員への音声 (ファイル) 提出機能
- ・音声の任意部分を簡単にリピート再生



◆<上図>ソフトウェア上では教材音声 (上側ライン) が波形表示され、部分選択に便利。学生が自分の声を録音すると、音声の下側ラインに表示され、教材との比較もできる。右下は教師用学生コントロール・リモコン (独立別ウィンドウ)。
<下図>教師用キャプションメーカーで教材文章の字幕を作成しておくとな図下部分のような表示もできる。



- ・キャプション (字幕) 機能 (オリジナル・日本語のオン・オフ選択)
- ・学習者モード選択機能 (ロールプレイング、リピート、シャドーイング、同時通訳機能など8つ)
- ・音声編集機能
- ・穴あけ問題作成、答え合わせ機能

周一四方のまなび 4

夏の信濃追分高原：過ぎ去らぬ者

2009年9月から刊行が始まった発表年月順編成の『加藤周一自選集』全10巻はあと1冊で完結する。加藤周一を読み継ぎ、読み続けている人は数多いはず(国の外にも)。大江健三郎は「まず若い加藤周一読者が十万人生じる」ことを望んでいる(「ちくま」2010年2月号)。10人生じることが起りえればと、僕はある演習のテキストに『高原好日』(ちくま文庫'09)を用いたのだった。

『高原好日』は信濃追分^{おく}で交友した人々の回想録。登場するのは有名人ばかりではない。世間に知られていない人だからこそ、発見の気分^{おき}にさせ、こんな人になりたい、こんな生き方をしてみたいと深い思いにさせる。

たとえば高坂知英という中学の同級生。自然科学・理化学系学術書の編集に携わる彼は、まとめて取った有給休暇のすべてを平安仏とロマネスク彫刻探索の旅行にあてる。

出世を求めず、加藤の良い読者であり続けた(この人には別に弔文がある。『自選集9』422頁)。

また、たとえば朝吹三吉。ジャン・ジュネの訳者として知る人は知る大学教師だが、妹、朝吹登水子ほど知名ではない。能力にふさわしい活躍をしなかったと加藤はいう。

「私は彼と話しているところへ少し後れて登水子さんがあらわれた時のことを思い出す。『ああ、今日は殊にきれいですね。その上着がよく似合う…』と兄は妹に言った。礼儀と優しさの混じったその自然な言い方に、私は全くおどろいた。」

全く、舞台の上の欧王朝演劇のようなではないか。性格の極端に謙譲な礼儀正しい人はめくらめっぽうな熱情発散はしないのだ。

登場するのは時代を同じくした人ばかりではない。白昼夢で、また巫(かなざ)を使って、死者が呼び出される。佐久間象山、小林一茶、島崎藤村らである。彼らはいずれも『日本文学史序説』にも登場し緊迫した叙述によって史的秩序に位置づけられている。

『高原好日』では相対的にのどやかに、ふくらみを持って会話を楽しんでいる。この本の最終行は「そして人生の愉しみは、可能なかぎり愉しまなければなら

ない…」である。だから、人生の愉しみを愉しめなくする状況に向うことは阻止せねばならない…。かくして思いは戦争放棄の条項に至る。

人生は短い。退屈してはもったいない。モーツァルトを聞いたことのない人は気の毒なのだ。

主著を読み、と加藤は言う。

『高原好日』は断固として加藤の主著ではない。が、主著と結ばれた願ってもない導入著作になりうると僕は思う。

たとえば丸山真男。「あたえられた現場の特殊性を離れず、また局所化することがない」丸山の仕事の参照を、『『である』ことと『する』こと』だけに止どめて置いていいのか。岩波新書『日本の思想』の一冊全体はそう安易ではないはず。加藤『雑種文化』との比較、『自選集』の丸山論相互の



MINERVA SCACCIA I VIZI DAL GIARDINO DELLA VIRTU
マンテーニャ画、1497-1502、ルーブル美術館(部分)

比較などの課題。

また、たとえば中野好夫。ニヤニヤした傍観者にならず、「重要な社会政治的争点について常に市民の側に立った」中野好夫の仕事の、加藤周一にひけをとらない“巨人”性にどう向いあえるか。

そしてさらに堀辰雄、片山敏彦、宇佐見英治の仕事。

開放的な『高原好日』の澄んだ時空に出現する人々の風貌。夏、限定された土地のつながりによる60人余の連作人物評のうちに、全員ではないが多くの人の叙述に共通する持続低音(basso continuo)といっておきたい問題意識がある。その通底する執拗な低音とは、「いくさ」である。「いくさ」=戦争、の時期の処し方である。

『高原好日』は実は宇佐見英治のための、追悼と和解と謝罪の書であったかもしれない。「路地の曲がり角に過ぎ去らぬ者として出現」する人物。「宇佐見英治とは一体誰であったか」。加藤周一のおのが未熟を自覚させるほどの人は…。

読む者に投げかけられた問いは残る。

「反戦の志の一貫性を前提としないで」見事な文章というものが成立しうるか、否か。

(一知半跣居小人)

新センター長、国際学部横山教授のメッセージ

四月から語学センター長になりました。よろしくお願い申し上げます。

さて、言語体験的な自己紹介をしましょう。九州は福岡県の生まれです。その南の方の方言が母語ですが、これは、共通語とは音声的にも文法的にも相当に違う言葉です。「きみのうちにいくよ」と「あがげさんくっぞ」の違いは大きい。それでも、小さい頃はテレビばかり見ていたので共通語の影響は強く、方言と共通語のバイリンガルの状態になるのは早かったと思います。そして、故郷を出て長い年月が過ぎ、すっかり母語を話す能力を失ってしまいました。実家の家族との会話も共通語でしかできません。

言葉を学ぶことには、色々な側面があります。人の中に新しい何かが形作られ未来を切り開くこともあります。その学ぶという行為がなかったら存在したはずの何かを失っていることもあり得ます。新しい言葉を学ぶことで見えるようになる広大な地平、そして消えていってしまうもの、あるいは存在の可能性そのものを消されるもの。それでも、人は前に進もうとするのでしょうか。未来は見えなくても、知ること、世界を広げること、その魅力には勝てない。私はその入り口にしかたどり着けていません。もうそれほど先には進めないでしょう。学生みなさんは、先人のたどった曲がりくねった道を、直線で突っ切って、さらに先に進んで下さい。その先にある世界は見えません。みなさんが初めて切り開くのですから。



◆自習室雑誌棚の前にて

語学センター第二期機器更新延期のお知らせ

語学センターでこの夏期休暇中に行われる予定だった408教室、自習室、事務室、ホール部分の機器更新が、諸事情により、年度末の春期休暇中に延期されることになりました。そのため、該当教室は今年度いっぱい、現状のままWindows XPとOffice 2003というパソコン環境になりますので、ご注意ください。(昨年夏に更新された403A・B、404教室はWindows VistaとOffice 2007の環境です。) この第二期機器更新につきましては、また、来年度のニューズレターで新機能などを紹介していく予定です。

視察報告

5月24日	瀬戸内高等学校	23名
6月24日	安芸南高等学校	22名
6月25日	海田高等学校PTA	34名
7月7日	高陽高等学校	24名
7月12日	安芸府中高等学校	20名
7月30日	広島文教女子大学附属高等学校	14名



高陽高校の視察の様子

視察では、
CALL プログラムの体験
衛星放送の視聴
自習室の見学
などをしていただいています。

お悔やみ：山本雅初代センター長



初代語学センター長(国際学部前教授、広島市立大学名誉教授)の山本雅先生が3月15日にご病気により急逝されました。

先生には、ニューズレター31号に退官記念メッセージをいただきましたが、そこに書かれたように、1994年の大学開学当時、語学センター設立にあたって多大なご貢献をいただきました。

「物より人を大切に」という先生のメッセージを忘れず、語学センターではより良い外国語学習環境づくりを目指していきたくと思います。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

発行日 2010年8月10日
発行 広島市立大学語学センター
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集 堀本真由美
伊達美和子(内線:6410)

Phone (082)830-1509
Fax (082)830-1794
E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ

<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>

